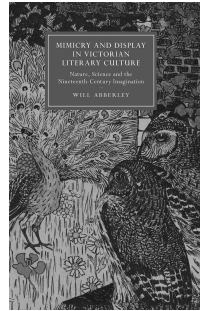


書評

Will Abberley, *Mimicry and Display in Victorian Literary Culture: Nature, Science and the Nineteenth-Century Imagination*
(Cambridge University Press, 2020)

町本 亮大(上智大学)



*OED*によれば、mimicryの語が「ものまね」といった意味あいではじめて使用されたのは1671年のことだが、これが日本語で「擬態」と訳される生物学用語として用いられるようになるのは19世紀である。「ベイツ型擬態」——実際には無害である種が有害な種に姿を似せることで捕食者から逃れることを可能にする擬態——に名前を残すレスター生まれの博物学者ヘンリー・ウォルター・ベイツ(Henry Walter Bates)は、1861年にロンドン・リンネ協会ではアマゾン動物について報告する。それまでベイツは11年にわたり、アマゾンの熱帯で生きる動物が周囲の植物や土壌、他の種の動物の外見をみずから纏うさまを観察してきた。ヴィクトリア時代の文芸文化における擬態と誇示をめぐる思索の展開を跡づけるウィル・アバリー(サセックス大学上級講師)の研究書がカバーするクロノロジーの始点が据えられるのは、ベイツがアルフレッド・ラッセル・ウォレス(Alfred Russel Wallace)とともに熱帯地方で生物の擬態を観察し多くの成果をあげた1850年代である。もちろん、生物が自らの姿を隠したり、他の種に似せたりする事例がそれまで知られていなかったのではない。しかし、進化における適応の概念と、ダイナミックで変化する自然のイメージを通じて、生物の見た目の問題がそれまでとは別次元の重要性を帯びるようになったとアバリーは考える。

擬態がなぜ文学の問題になるのか。それは、この現象が生物とは本来的に解釈的存在であることを示唆しているように思われたからである。演劇的な見せびらかしも、修辞による飾り立ても、自らのアイデンティティを偽ることで騙したり、欺いたりすることも、墮落した人間世界に固有の不

自然なふるまいであるどころか、生物学的なデフォルトといえるのではないか。自然を美化するパストラルの伝統こそ人為的虚構物ではないか。生物学は、伝統的宗教との対決で自然から「意味」を剥奪するどころか、「適応的外見 (adaptive appearance)」(2) という「記号」とその解釈というプロセスの遍在を明らかにすることで、自然にはもともと「意味」が充満していることを示しているのではないか——擬態という現象はこれらの問いを誘発し、キングズリー (Charles Kingsley) からギルマン (Charlotte Perkins Gilman) にいたる一連の作家たちの文化と社会をめぐる思索において重要な比喩として機能した。

とはいえ著者は、ジリアン・ピア以降に〈文学と科学〉の分野で仕事をした多くの研究者の流儀に倣い、適応的外見を単に科学理論の問題とみるのではなく、科学者集団の内外にまたがり共有されたディスコース——「隠喩、神話、ナラティヴ・パターン」(3)——として取り扱う。科学の専門用語が文学の世界に流れ込むさまを跡づけるというのではなく、博物学者もまた文学や美術の領域と交渉しながら擬態という現象にアプローチしたと考える。そのため本書の第1章 ‘Seeing Things: Art, Nature and Science in Representations of Crypsis’ が扱うのは、隠喩としての擬態でなく、文字どおり生物学的現象としての擬態に取り組んだ博物学者たち——ベイツ、ウォレス、ポウルトン (Edward Bagnall Poulton)——と、芸術家として自らが擬態について特別な洞察を持つことができると信じたアメリカの画家セイヤー (Abbott Handerson Thayer)——である。

標本を実験室で眺めても、擬態の現象を観察することはできない。实地に赴き、動く生物を自然な角度から見てこそ「騙しのダイナミクス」(35)を知ることができる。観察者の騙される経験を記録し伝達することは、擬態を理解する適切な科学的手続きであるはずだ——こうした想定のもと、ベイツとウォレスは熱帯での自らの経験をエピソードとして語る。そこでは、観察者のおどろきといった主観的応答が率直に記録され、しかし解剖学的知識に基づき距離をとって分析的に眺めることで騙しのからくりが見破られる、という一定のパターンを看取することができる。アバリーによれば、こうした「発見」のナラティヴには、「精神が事物を十全に知覚せずにすませる近道を学び捨てる (unlearning)」(30) 視覚の教育を自らの使命

と考えたラスキンの著作の残響を聞き取ることができる。エピソードによる経験の伝達に加え、図版を用いることもできた。ここで著者が取り上げるポウルトン、ラスキンの講義にも通ったオクスフォードの昆虫学者である。静止画(というのは動画の時代の言葉遣いだが)を用いて擬態の視覚的トリックを伝えるには、やはり文章に頼るほかない。アバリーの見立てでは、ポウルトンはラスキンが芸術に用いたエクフランスの技法を、生物を描写するのに応用している。本章の最後に論じられるアメリカの画家セイヤーもまた、芸術家は「特権的見者(seer)」であるから擬態に対しユニークな洞察を持つことができると信じた点で、やはりラスキンの視座に立って仕事をした「芸術家=博物学者」(63)だった。

第2章‘Divine Displays: Charles Kingsley, Hermeneutic Natural Theology and the Problem of Adaptive Appearance’で論じられるキングズリーは、デヴォンの海岸地帯を散策して「海辺の驚異」を記録した『グラウコス』(*Glaucus*, 1855)により「牧師=博物学者」(71)として名をなし、『種の起源』を歓迎して進化論的童話『水の子』(*The Water-Babies*, 1863)により名声を不朽のものにしたのだから、本書が彼に一章を割くのは理解しやすいことである。キングズリーは、神は嘘をつかないから、truthfulnessという美德は自然のうちにも読み取られるのでなくてはならないと考えた。だとすれば、マキャヴェリの欺きを肯定するかのような適応的外見という自然の現実をどう解釈すればよいか? この章は、キングズリーが自然の欺きという現実を、神的価値を備えた象徴としての自然の観念と両立させようとした苦闘の過程を追跡する。ときに自然じたいより科学という人間の無私の営みの方に摂理の実現を見出そうとしたようにも思えるが、キングズリーは自然に道徳的意味の形跡を求め続けたというのがアバリーの見解である。

第3章‘Criminal Chameleons: The Evolution of Deceit in Grant Allen’s Fiction’の中核をなすのはグラント・アレン(Grant Allen)の小説だが、彼もまた科学に関して一般向けに多くの文章を書き残した著名な文筆家であった。ベイツとウォレスの友人で、『ブリタニカ百科事典』第9版で「擬態」の項目を執筆したのがアレンである。この章では、アレンが小説で描いた殺人犯やコンマンの欺きの根底には、彼の適応的外見への関心が存在したことが論じられる。アバリーによれば、「カメレオンの犯罪行為」(87)を

描くアレンの作品群は、進化についての二つの対立するヴィジョンに引き裂かれている。一つは、ダーウィンの、非目的論見方で、知性が向上し社会が複雑化すれば、利己的な欺きはより巧妙で洗練されたものになるというもの（アレンはセンセーション小説、探偵小説のきまりごとを破り、悪事の暴かれない物語を描いた）。もう一つは、より楽観的なスペンサー風の見方で、科学と合理性が、欺きへと人を駆り立てるエゴイズムを消滅させ、欺きにひっかかる騙されやすさも克服するだろうというもの。本章の締めくくりに、社会主義者としての自らの思想を明瞭に打ち出す小説を諦め、なかばシニカルに大衆に迎合した作品を生産することを選んだアレンは、まるで彼じしんがポピュラー・ジャーナリズムの領域でひとびとに解説した「擬態する有機体」(113)の仲間入りをしたみたいだという見方が示される（自己表現からの逃避としての擬態という主題は第5章に引き継がれる）。

第4章 ‘Darwin’s Little Ironies: Evolution and the Ethics of Appearance in Thomas Hardy’s Fiction’ は、トマス・ハーディ (Thomas Hardy) の小説において欺きの道徳的評価が両義的であるのは、作家の適応の外見への関心とかかわりがあるのだということを示そうとする。彼の継承したパストラルの伝統は、虚偽を人為 = 都会と関連づけ、自然の世界、田舎のひとびとを正直、実直の美德と結びつける。しかしハーディはダーウィンら博物学者の仕事に親しんでいたものであり、人間を遺伝と環境という道徳と無関係に作動する物質的過程の産物にすぎないとみるリアリスティックな視点も持ち合わせていた。これがパストラルの世界観と衝突した結果、ハーディにおいて騙しは無条件の悪というのではなく、それが利己的動機を持つか、利他的動機を持つかにより評価の分かれる両義的なものとして描かれるようになる。

第5章 ‘Blending in and Standing out, I: Crypsis versus Individualism in Fin-de-Siècle Cultural Criticism’ は、レズリー・ステイーヴン (Leslie Stephen)、セオドア・ワッツ＝ダントン (Theodore Watts-Dunton)、ウォルター・ペイター (Walter Pater)、オスカー・ワイルド (Oscar Wilde) を取り上げ、独創性や自己表現の理想をめぐる彼らの思索のなかで、擬態を中心とする生物学的諸概念がいかなる形で隠喩として機能したかを問題にする。世論の

専制への危惧や大衆操作の問題が密接にかかわるからといって、ミルやアーノルド、バジヨットに言及するのでもなく、擬態の隠喩を中心に据えて世紀末の文化批評の地図を描き直すところに新鮮さを感じた。ペイターが『プラトンとプラトン哲学』(*Plato and Platonism*, 1893)のなかで、オートマトンのごとき人間の模倣を「足元の植物から色を借用するという博物学者の伝える昆虫たち」(165)の擬態になぞらえる箇所など、本研究のような問題設定をしない限り読み飛ばしてしまうところである。先行する歴史と伝統の選択的模倣により逆説的に自律の余地を創出するペイターの個人主義を『享楽主義者マリウス』(*Marius the Epicurean*, 1885)に読み込むアバリーの解釈は、「言語の進化」を論じた前著¹における有機体論的語源学の議論に裏づけられたもので、簡潔ながら刺激のかつ説得的である。

前章の批評家たちが個人の自律性や真正性とのかわり方で擬態の隠喩を用いたのに対し、同様のことを集団のアイデンティティの問題として考えた2人の作家を扱うのが第6章‘Blending in and Standing out, II: Mimicry, Display and Identity Politics in the Literary Activism of Israel Zangwill and Charlotte Perkins Gilman’である。イズレイル・ザングウィル (Israel Zangwill) は、ロシアから亡命したユダヤ系移民の息子であり、ホワイトチャペルのユダヤ人コミュニティで育った。合衆国移民の経験を描く戯曲『るつぽ』(*The Melting-Pot*, 1909)はセオドア・ローズヴェルトに絶賛され、世紀転換期には「英語圏で最も著名なユダヤ人」とまで称されたという(179-80)。ユダヤ人の支配的国民文化への同化を「擬態」として両義的に描くザングウィルは、共生 (symbiosis) のかわりに‘autobiosis’を目指すシオニズムを支持したが、おそらくはペイターやワイルドの影響下で、民族的アイデンティティをより流動的に捉える視点——「われわれはみなハイブリッドである」(185)——も持っていた。本書の翌年に出版されたステファノ・エヴァンジェリスタの「文学的コスモポリタニズム」研究²がザングウィルを主要なアクターとして重視するのは示唆的である。

アメリカの社会改良家シャーロット・パーキンズ・ギルマンが問題にしたのはジェンダー・アイデンティティである。本書の論じる著者の大部分が〈隠れること〉に関心を寄せたとすれば、フェミニスト作家のギルマンは女性〈見えものにされること〉を問題にした(本書のタイトルを構成する

二項 *mimicry* と *display* のうち、後者はほとんどギルマンのために掲げられている)。女性が華やかな服装で男性の目を引くことを要求される家父長制社会の現状を、ギルマンは性淘汰における誇示の概念と結びつける。これは不自然な状況である。なぜなら、自然界では雄も雌も同じ環境でサヴァイブする必要があるから、両者の差異よりは共通性が発達するはずであり、性の二分化を促進する性淘汰は、自然淘汰の圧力により歯止めをかけられるからである。家父長制社会は、女性を男性の経済的従属下に置くことで、自然な「歯止め」の機能を無効にしてしまった。かくしてギルマンは性差についてはアイデンティティへの本質主義的アプローチを拒絶したが、真の人間らしさというような本質主義的観念は保持した点に限界があったというのがアバリーの結論である。

結論部で明言されるように、本書の議論は^{バイオセミオティクス}生命記号論、^{ズーセミオティクス}動物記号論、エコクリティシズムを中心とする文化理論の諸動向に多くの示唆をもたらすものである。同時に、現在ではあまり読まれないアレンやザングウィルへの関心を再興するにも貢献することが期待される重要なヴィクトリア朝文芸文化研究である。

註

1. *English Fiction and the Evolution of Language, 1850-1914* (Cambridge University Press, 2015).
2. Stefano Evangelista, *Literary Cosmopolitanism in the English Fin de Siècle* (Oxford University Press, 2021).